

《論 文》

台北高等商業学校の商業教育関係資料 について

渡 辺 邦 博

目次

1. はじめに
2. 資料収集の場所
3. 台北高商教員データ
4. 台北高商卒業生データ
5. 小括

1. はじめに

私は、2012年と2015年の二度にわたり、中華民国外交部 MOFA の事業である台湾フェローシップの助成を受け、旧日本が台北に設置していた台北高等商業学校の調査研究のための滞在をすることができた。不在中、本学の諸事に対する義務を軽減して頂き、ご海容を示された、学長先生はじめとして、本学の諸氏に対し、改めてお礼申し上げたい。

本来は、助成金提供者である台湾フェローシップに対する報告義務を遂行するための準備としてこの作業を進めたのだが、この際その改訂版を掲載することにした。何よりも、この制度により、私の蒙が啓かれたことを示すだけでなく、私以外の方々にも視野を外部に向けて欲しいと

希望するからである。私のトライした要領を示しておこう。¹

私が台湾に公式出張したのは、以下の2度である。

第一回 2012年 1月8日から4月26日まで

第二回 2015年 1月10日から4月31日まで

<ただし、台北到着後すぐに4月5日までの滞在と、7月23日から8月18日までの滞在に変更してもらった。それは、本務校での教育義務を考慮してのことである。他方で台湾フェローシップの規定によると、助成金を受ける者は、最大1年間の滞在期間のうち、3ヶ月は連続して滞在するとの義務があり、その後は分割しても許されることを交渉過程で知ったからでもある。>

今回の台湾滞在に際しては、前回の反省もふまえて、研究課題を台北高商全般から、この学校の活動を追跡する場合に、基本的な前提となると思われる人的データベース、別言すると教員スタッフと卒業者の名簿作成資料の収集に集中することを、目的とした。

1 「募集要項」から以下の要旨を抜粋する。

Eligibility: 1. Foreign professor, associate professors, assistant professors, post-doctoral researchers, doctoral candidates, or doctoral program students at related departments of overseas universities, or research fellows at an equivalent level in academic institutions abroad.

2. Field of research: Topics in the social sciences and humanities related to the Republic of China (Taiwan), cross-strait relations, mainland China, the Asia Pacific, and Sinology.

Awards: 1. One direct round-trip economy-class ticket subsidized between the recipient' country of residence and Taiwan. (With maximum subsidy limits.)

2. Monthly stipends:

(1) Professors, associate professors, research fellows, and associate research fellows: NT\$60,000

(2) Assistant professors, assistant research fellows, post-doctoral researchers, doctoral candidates, and doctoral program students: NT\$50,000

3. The minimum duration of a fellowship is three months, and the maximum one year.

4. Accident insurance of NT\$1,000,000 is provided.

Application period is from May to June 30.

となっている。

台北高商全般から、卒業者名簿の収集へ焦点を意向

前稿（渡辺 [2013]）を継承して、私は台北高等商業学校の研究において、商業教育の結果・成果を検討する作業の中で、同校の卒業生名簿を探索する作業を行った。その一部は渡辺 [2015] において公刊したが、とりわけ第2次世界大戦の影響を受けた時期の資料が未解決な問題を孕むので、最終的な成果の公表に至っていない。²

本稿では、2015年1月から行われた、台北を中心とした調査の進捗状況を記録して、今後の研究の一階梯としたい。

2 ここで、研究方法について若干述べたい。2012年の調査滞在の折には、研究計画の焦点をどこに置くかといった基本的な点をはじめとして、研究資料の状態、研究施設の所在など、五里霧中状態で時間の浪費をしてしまった。たまたま、本学の連携協力校であった、台湾南部に位置した屏東の国立屏東科技大学にも歩を進め、台南市や、台湾各地域の人脈を構築する点では、ある程度の成果があったが、調査を集中的に行ったものは乏しいと言わなければならない。ヨーロッパの研究機関には、少しこころ覚えもできたが、台湾という土地で、どのような研究調査条件が与えられるかにも不案内だったので、用意した道具は、極力単独でも実施できる作業に必要なものであった。

図書館に入って、効率的な資料収集と記録、暫定的ではあったが執筆作業に、iPad、ハンディスキャナ、フラッシュメモリ、これらをカバンに携行して、作業が行われた。ただ、スキャナで収集した資料を閲覧加工する際には、コンピュータが必要で、屏東科技大学に1ヶ月前後滞在した2012年3月から4月にかけては、同大学技職所からパソコンを用立てて頂き、同所とゲストハウスにおいて収集資料の整理や分析が可能であった。その際、収集した資料をフラッシュメモリに落としたり、加工したりすることが可能となって、同年4月に撤収する際に、この奨学金（台湾フェローシップ）のささやかな義務の一つ、A4サイズ用紙に5枚程度のショートレポートの作成にも役立てることができた。iPadは、軽いし、バッテリーの持ちもよく、キーボードを持参したところで、かさばらないのでとても重宝したが、スキャナで入手したデータを吟味しようとする、やはり何処かでパ

2. 資料収集の場所

A. 国家図書館 2015年1月11日以降

<写真は、國家図書館の案内冊子>

ソコンを使用する必要があって、もどかしさが残った。

今回は、持参した道具が変化した。Genius Scan を装備した iPhone6 が、とても役に立った。したがって、今回は iPad もフラッシュメモリも出番がなかった。資料の収集はほとんど iPhone の Genius Scan で行い、Dropbox、One Drive、Google Drive、Copy などのクラウドにそれを保存することで前回と比べると格段の能率が上がるのを実感した。ゼロックスコピーで資料を収集すると、撤収する際に荷物が重くなって、苦心するのからかなり解放された。また、ゼロックスコピーとは異なり iPhone のカメラ精度は極めて優れており、鮮明な資料が得られた。あるがままに撮影するゼロックスと、資料の状態に弾力的に合わせた撮影が可能な iPhone の相違は、古文書などを複写する際に、劣化して変色した紙に残る活字と、紙それ自体の色を綺麗に区別差別して撮影が可能かどうか、その点に現れる。場所をとらないことは、同時に重さを軽減できるメリットとなる。また、集めた資料を後で判読する場合に、全く能率が違ってくるのである

2015年1月10日に台湾に入国して、12日国家図書館でMOFAの手続きを終了した。2012年の場合には、この国家図書館の5階にカレルを用意してもらい、毎日午後5時頃までそこに籠ったこともあった。今回も要求すればカレルを利用できたが、受け入れて頂いた中央研究院・台湾史研究所のオフィスが提供されたので、国家図書館にはネットワークを利用して、台湾各地に所蔵されるローカルな資料などの確認に時々利用した。³

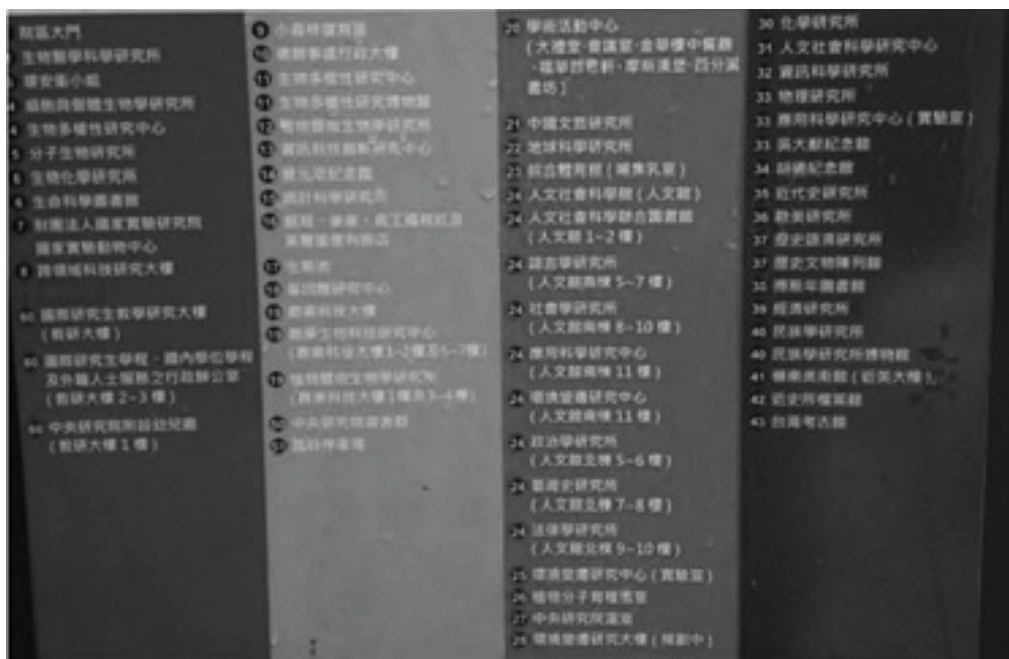
B. 中央研究院・台湾史研究所 Academia Sinica



＜中央研究院の敷地の最も西側の奥に位置する、総図書館をも取り込んだ建物、この北館8階に台湾史研究所がある＞

³『從帝大到台大』、『実業教育五十年』 正統の再調査の場合に利用した。

中央研究院、別称アカデミア・シニカでは、2015年1月12日以降の今回の受け入れを快諾して頂いた、シニカ台湾史研究所の林玉茹氏に会い、助手からライブラリーカードを頂く。日本から持参したジェイムズ・ステュアートの『経済の原理』名古屋大学出版会刊（全2冊）を研究院図書館に寄贈する。今後50年後？に台湾の経済学史研究者の役に立てばと思う。シニカ北館の10階にオフィスを用意してもらおう。前回は、国立屏東科技大学に受入校となって戴いたが、この台北での調査研究に際しては、シニカ付置のホテルから数分で歩ける図書館へ出かけるしか方法がなかったので、iPadが有用であった。今回は、机とデスクトップ・パソコンが利用できて、作業の進捗状況が異なる。



<中央研究院に集結している研究所群、もちろん経済研究所もあった>

1月13日からは、シニカ10階を拠点とした研究を開始した。

今回は、台北高等商業学校の教員と学生のデータベース構築に焦点を絞っているので、作業は捗るのではないかと判断していた。

シニカには、台湾史に関する史料はほとんど取り揃っているとのアド

ヴァイスで、ここに日参することにする。シニカの図書館には、台湾総督府関係の文書が、閉架開架双方で検索閲覧ができる。さらに、8階の台湾史研究所のアーカイブにも所蔵されている史料がある。

ここでは、総督府関係文書を中心に収集読解を進めた。

今回の調査は、台北高等商業学校の教員と学生リストの作成に力点をおくことにしたので、教員の場合には、人名録を作成する基礎データの収集を優先する。

まず、台湾総督府から出された『文官職員録』（台湾日々新報社）を、商業学校関係の記載のある、大正6年前後から閲覧を開始した。この『職員録』を中心に、関連する文書を探し、現代風に言えば、小学校を卒業した生徒を対象とする「高等」を付さない「甲種」商業学校の記載をチェックして、大正8年に高等商業学校創設に尽力した隈本繁吉、切田太郎、遠藤寿三、西澤二松などの名前を確認し、大正9年には、商専と並んで、台湾総督府高等商業学校の校長として片山秀太郎が、大正11年には校長に加藤正生を頂いた台南高等商業学校の設置も記載されている。

こうした教員スタッフの個々人の履歴を作成するとして、この職員録データを基礎に、教員について、この学校に就任する以前と以降の履歴が追跡できないか？その場合、参考にしうるものとして、「職員録」以外の人名録を探索する作業もあると思われる。

C. 国立中央図書館台湾分館 National Taiwan Library



< MRT 永安市場にある国家図書館の分館パンフレット >

この図書館は、大正3年に台湾総督府図書館として出立したもので、MRT 永安市場駅からすぐの場所にある。その最上階には、日本統治時代の史料が保存・提供されているのだが、そこでもじっくり探せば有益な史料があるように思われる。そこで、1点「台湾人士録」、與南新聞社、昭日刊十週年記念出版、昭和18年を見つけた。そこには、初期台湾総督府高等商業学校のスタッフ、庄司久孝、寺井邦樹、今西信彌、広橋次郎、松尾 弘、たちの業績項目が盛られている。⁴

⁴「台湾官紳年鑑」なるものも、出版されている。民衆公論社主幹 林 進発著『台湾官紳録』台北民衆公論社、昭和7年。切田太郎、瀧波総之進、など掲載。

D. 台湾大学総図書館



〈台北帝国大学を基礎に戦後出立した台湾大学総図書館〉

旧台北帝国大学が、第二次世界大戦後国立台湾大学として改称改変して成立した大学の中央図書館、シニカと台湾大学のある場所はかなり離れているのだが、大学院生・研究者の便宜をはかり、朝から夕方まで、頻繁にシャトルバスが運行している。社会科学院も経路に入っているだけでなく、台湾大学以外の郊外の大学、例えば清華大学などにも、朝夕の便があった。もちろんフリーである。私は、8:00 台のバスで総図書館に毎日のように通った。台湾大学の生協や食堂もフルに利用したが、学生のアメニティを考慮して、とても充実した環境で、数十年ぶりに学生のような気分になれた。

台湾大学は台北を中心に諸高等教育機関を統合して出来上がった総合大学で、台北帝国大学は基本的に理系を中心とした大学であった関係もあってか、文系は旧台北帝国大学の文政学部が母体となって戦後の大学

は発展して来ており、旧高等商業学校であった台北高商を必ずしもスムーズに統合していない。台北高商は台湾大学社会科学院としてつい最近まで元台北高商のあった場所に半ば独立して存在していたが、最近ようやく台湾大学への統合が完了するようで、公館キャンパスに図書館共々移転を開始している。将来は、台北高商の資料も公館キャンパスで検討することができるのであろう。⁵

E. 國史館台湾文献館 Taiwan Historica

この文献館ヒストリカは、中華民国台湾省政府が1948年に歴史史料保存のために設置した「台湾省通史館」にルーツを持つが、その後の組織転換を経て、1999年台湾省政府の直属のものとなり、2002年「国史館台湾文献館」と改称して、総統府所属の機関となった。南投市光明路には、文献館以外に、文物館、史蹟館もあって、喧騒の都会とは異なる雰囲気の中で調査を進めることができる。

私の関心から言えば、例えば旧官立の諸学校、その中に台北高等商業学校も含まれるが、それに関する公文書のオリジナルが閲覧できることに利点がある。台北高商の教職員の人事に関する書簡、辞令、履歴書などがデジタル化されており、いく人かの教員に関係する資料を入手できた。香坂順一氏の履歴書も見つかったことを付記しておきたい。ただ、

5 辜振甫先生紀念図書館では、台北高等商業学校を継承した台湾大学・社会科学院に主だった資料が移転しつつある。拙稿 [2015] を参照のこと。

6 吉田『地名辞書』「清の時代から、北投、南投などを合わせて一区を形成したが、夙くから陶窯が開けており、日用土器を製造して中部台湾の需要に応ずるところであったと記されている。」近傍には、台湾全島中心点と言われる捕里鎮（東経120° 58' 25" 9750, 北緯22° 58' 33" 3400）があり、紹興酒の産地として知られる。この辞書は、かつては日本であった台湾の地名を検索するのに有益である。時間の経過によって、台湾の諸事情も変化しているが、地理的な知識を入手するには便利である。

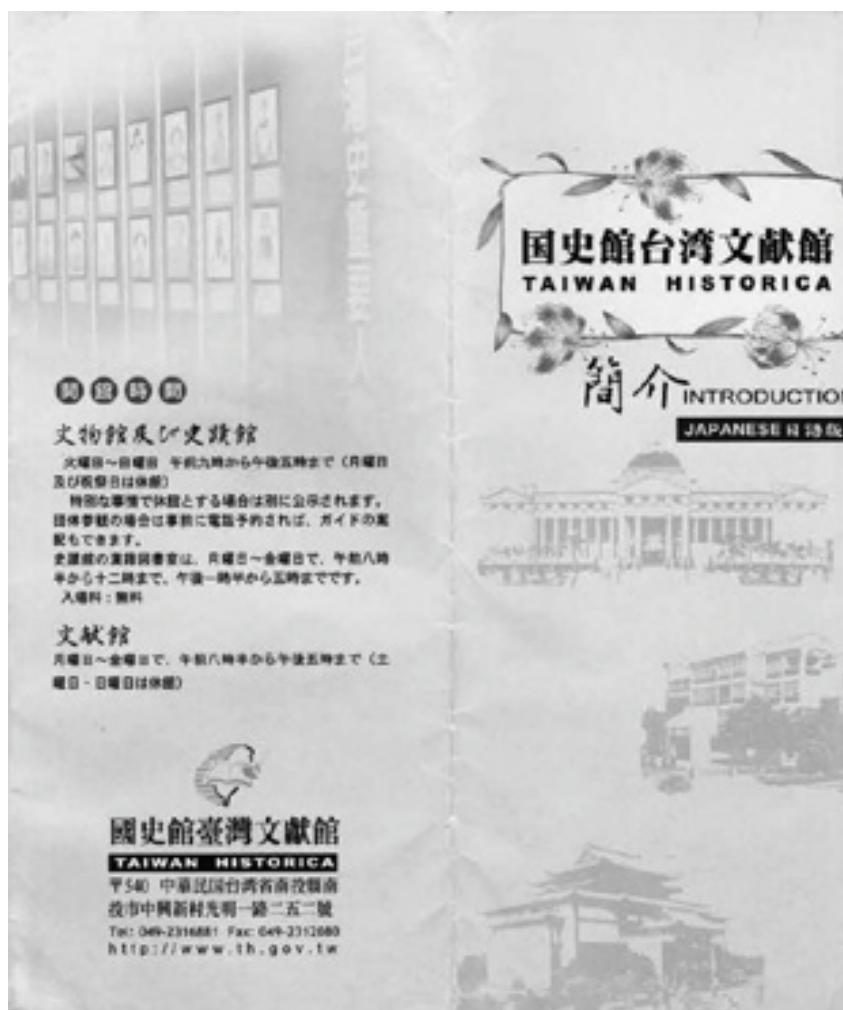
7 國史館台湾文献館は、台北からは、台湾高鐵の台中、または在来線の台中（バスセンターの干城）からのバスで1時間弱、あるいは台北中央駅近傍の高速バスセンターからのバスで約3時間10分である。光明里、または省訓團下車。南投市は繁華な場所ではないので、滞在場所を確保しておくことが肝要かと思う。

一時期台北の総督府高等商業学校と並立したことがある台南高等商業学校関係資料が所蔵されているか期待したが、残念ながら収穫はなかった。

南投⁶にあって、旧省政府の跡総督府関係文書のオリジナルを所蔵している。⁷



<写真は、史蹟館と文献館>



<ヒストリカのパンフレット>

3. 台北高商教員データ

まず、「総督府職員録」を中心に、大正7年から昭和18年まで検索した。⁸

また、シニカには、『台湾官民職員録』が大正11年、昭和2年、昭和5年と所蔵されていて、昭和3年の、台北帝國大学、台北高等商業学校（武

⁸シニカには『台湾人士録』もあって、伊大知良太郎、石崎政治郎、遠藤寿三、新里栄造、渡辺三郎、津村和夫、坂田國助、河合 讓、杉浦治七、石橋憲治、鹽谷巖三、小島伊三男、江幡義雄、などを検索できる。さらに、シニカには帝国大学出身名鑑『帝国大学出身人名辞典』日本図書センター、もあり、隈本繁吉を検索した。

田英一校長)、そして台南高等商業学校(加藤正生校長)、昭和5年の台北高等商業学校(切田太郎校長)のスタッフなどを確認できる。

シニカには、『学士会台湾支部名簿』昭和9,10,11年合本、昭和13,14,15,16年合本があり、「学士」の履歴や現職などの調査に有用であるのを発見した。⁹

すでに述べたように、教員スタッフの名簿の基本データは一方で台湾総督府刊になる『文官録』ないし『職員録』であるが、他方で台北高等商業学校自体が公刊した学校一覧『台北高等商業学校一覧』(以下『一覧』と略称する場合がある)が存在する。これにはカリキュラム設備など種々の情報が盛り込まれているが、教員スタッフも記載されており、終戦直近の時期は別として、累積データを作成し易い。

この辺りで、舞台を台湾大学に移す。

台湾大学における台北高等商業学校関係文書の存在については、前回2012年春の出張で確認されたが、第二次世界大戦後の台湾政府による高等教育再編過程で、旧台北帝国大学をベースにした台湾大学への移行と、旧台北高等商業学校からの高等教育機関への移行が必ずしも歩調を一にしていらないように見受けられる事情もあってか、現在 MRT 善導寺駅近傍にある旧台北高等商業学校から移行した台湾大学社会科学院における資料の存在と、台湾大学における高等教育関係資料の存在とが、私

9「職員録」の転写に集中していた時、他大学の研究者に頼まれた、旧台北高商スタッフであった河合 讓の経歴を調査して、この人物が昭和7年、昭和8年、昭和9年あたりに在籍したことを確認したが、昭和12年から16年まで高雄の商業学校の校長として転出しており、その後昭和17年、18年には高雄にも台北にも在籍の形跡がないのもいくつかの根拠から確認した。

これをまとめると、河合は、昭和7年から11年まで台北高商教授として在籍、昭和8年創刊の学内学会誌『南邦経済』に6本の投稿をしたり、この間に現在まで伝わっているこの高商の「校歌」を作成し、いわゆる同窓会誌とみなされる『鵬翼』の編集指導を行った、と推定される。この頃『鵬翼』は、校友会の編集から昭和5年頃に校友会学芸部に変更しており、河合は13号巻頭言、19号巻頭言、20号巻頭言を執筆している。

他方で、「思想調査」に協力したと言われる伊大知良太郎が昭和9年から赴任している。

には明瞭でなかった。

つまり、一方で社会科学院で資料を請求閲覧しつつ、他方で台湾大学総図書館5階のスペシャルコレクション・ルームでの資料閲覧を併用する必要があったから、不便を感じる面もあった。二回目の調査となった今回は、特に卒業関係の文書は台湾大学に存在すると判断して、台湾大学への訪問を頻繁に行い、卒業関係資料をかなり詳細に閲覧出来たし、ちょうど2月の春節前後に社会科学院が大規模な休館？状態となって訪問不能となったのと、後述のように社会科学院に存在する高商関係資料自体が、台湾大学キャンパスへ移行しつつあることを知ったので、作業は一層台湾大学に集中する結果となった。¹⁰

台湾大学総図書館5階では、この『一覽』昭和13年(1938年)が所蔵されており、このデジタルデータをフラッシュメモリにコピーしてもらった。同時にここには、高商卒業生の卒業論文タイトル集があり、前回は閲覧はしていたが、これもデジタル化した。

以上のような収集にもとづいて、『職員録』と『一覽』を基礎とした台北高等商業学校教員スタッフデータベース(仮称)と、後述のように基礎

10 もう一点、別の注2)でも述べたことに関係するが、従来マイクロフィルムという形で保存された資料は、手間はかかるけれども、最新のデジタル技術で、撮影し直して利用に提供する必要があるのではなろうか？ 第一にマイクロフィルム化の過程で、資料に焦点が合っていない場合、いくら凝視しても判読できないし、撮影できていない部分も同様である。今回、台北高等商業学校のいわゆる同窓会誌とみなされる『鵬翼』<台湾大学には、1-22(23欠)24-29まで所蔵>をマイクロフィルムで閲覧したが、3年前に実物を閲覧して一部ゼロックスコピーを持ち帰った関係で、資料の有り様は承知しているが、時間をかけても、マイクロフィルムをリーダーによって判読するのは、苦行である。マイクロリーダーによる閲覧を行うなら、撮影に時間をかけて、より鮮明な資料に作り直すのが望ましい。

11 閑話休題 台湾大学総図書館には、特に民俗学関係の日本語の広く深い所蔵物があり、つい横道に逸れそうになるが、そこで昭和9年11月29日の日付のある台北高等商業学校『思想調査報告書』を見つけた。「本調査は、主事河合 讓教授の調査に係るものなり。故に之の内容に関する批評、質疑、感想等は、総じて同教授宛に申出られたし。」と注記されている。参考文献に挙げた、ウェブ公開中の竹内洋の研究などを参照すると、「昭和6年を境に戦時体制と戦争が学生騒動を消化した」とあるが、昭和9年時点での調査の成果はどの程度のものであったろうか。

データは職員とは少し異なるが、卒業生名簿（仮称）を作成し始める。¹¹

4. 台北高商卒業生データ

台湾大学総図書館5階には、台北高商の「卒業生名録」とされるものが保存されている。これは、学生1名について1枚ずつ卒業の年度ごとに作成された手書きの綴りであるが、いわゆる『一覧』に毎年卒業生として記載されているものと照合してみると、卒業生名簿の原簿と推定されるものである。仔細に検討すると、『一覧』と「名録」とは必ずしも同一ではないが、『一覧』が印刷されるに際して、その元となったと思われる。各年にはその年の卒業生全員が一枚以上の用紙に一覧され、その後表の順序に従って各学生の、生年月日、出身校、本籍、入学年度などが記載されており、例えば旧台北帝国大学の場合、旧台北高等学校の場合にこの種のものも存在したかもしれないが、筆者が5階で発見できたのは、台北高等商業学校のものだけである。

以下参考までに、「卒業生名録」ファイルを一覧表にしてみた。

卒業生名録

第1回 - 第3回	1922-24	大正 11,12,13
第4回 - 第6回	1925-27	大正 14,15, 昭和 2
第7回から第9回	1928-30	昭和 3,4,5
第10回から第11回	1931-32	昭和 6,7
第12回から第14回	1933-35	昭和 8,9,10
第15回から第17回	1936-38	昭和 11,12,13
第18回から第20回	1939-41	昭和 14,15,16
第21回から第23回	1942-44	昭和 16 (12月) ,17 (9月) ,18 (9月)
第24回から第25回		昭和 19 (9月) ,20 (9月 & 12月)

*昭和15年までは毎年3月卒業である。

この「名録」を基にすれば、在学した学生の入学から卒業へと移動する経路が追跡されうるので、いくつかの作業を試みてみた。出身高校の分布などは、その最たるものである。

さらにこの名録の意義は、『一覽』が必ずしもこの学校の終焉までの資料として存在しないのに対して、手書きではあるが昭和20年分まで保存されているので、この学校の最後の局面を窺い知ることも可能となることに存する。その結論を性急に下すよりも、まずはせっかくの資料をデータベース化する、私はその点に重きを置いて作業を進めた。

何度も述べたように、現在、旧台北高等商業学校として機能していた機関は、台湾大学社会科学院と称されるものとなっており、台湾大学への統合が進行していて、とりわけ私などが調査対象とする台北高商関係の文書は、台湾大学佺振甫先生紀念図書館へ移動中であって、台湾大学総図書館に所蔵されている資料群と同時に参照閲覧するのが、従来に比べて容易になりつつある。また、埋もれていた資料も日の目を見ることが出来るのではないかと思われる。

台北高商の初期から各年ごとに作成されてきた『一覽』では、昭和16年刊が最新のものではないか、と現在の私は推定しているが、「公式」データを前提とすると、この『卒業生名録』が『一覽』を補完する資料とみなされることになる。^{12 13}

12 台北高商の本科以外のコースについては、例えば第二部支那科、貿易専修科、あるいは東亜経済専科などについては、これまであまり詳らかに認識されているとは言えないので、この『名録』がすべてを補うものではないが、両者を突き合わせれば、従来以上の事実も明らかになるとと思われる。

13 『名録』の不十分さは、次の点にも明らかである。ただし、それは従来この資料がほとんど利用されてこなかったことによると推定される。例えば、昭和8年の「名録」は、表紙は昭和8年であるが、綴じられている学生記録の中身はそうでない。私の考えでは昭和18年のものが昭和8年に綴じられているのではないかと思われる。そうした場合の修正資料として、『一覽』が役立つのである。『一覽』の昭和8年卒業生名簿を「名録」に綴じられているものと照合すれば、綴じられている名簿が昭和8年の卒業生と合致するかどうかは、直ぐに判明する。

5. 小括

不十分ながら、2015年の台北滞在の際の調査概要を示したので、若干の教訓をまとめておきたい。

教員データについては、「職員録」や「学校一覧」を基本としつつ、散発的ながら存在する各種の台湾関係人名録・紳士録データを追加しながら、データベースを構築し、学生データについては、昭和16年までは『学校一覧』を、それ以降は「卒業者名録」を併用すれば、ほぼ完全なデータベースを作成するのが可能である。

前後したが、最期に最小にではなく、今回も調査ならびに検討の便宜を与えられた中華民国 FOFA、台湾フェロシップのご配慮には感謝しなければならない。今回2月10日の歓迎会を兼ねて國家図書館で開催された奨学生のための忘年会には、世界各国からおおよそ60名のメンバーが出席し、それぞれ自己紹介を兼ねたスピーチを聞くことができたが、いわゆるシリアスなテーマで来台していたのは私を含めて数名で、残りは民俗学、人類学、演劇、少数民族問題、アボリジニーの音楽等々、まことに多彩な内容であった。私の横に座っていたオーストラリアから来た大学社会学の教員が、ジェネラスと表現したが、本当に「寛容な」方針でエントリが許されていた。滞在条件のうち、1ヶ月に2週間は台湾に滞在することにも驚いたが、実際オーストラリアからの社会学者は、1月に台湾を訪れ、2月にはドイツの学会に出席すると述べていた。

いわゆるファンドの提供の仕方も、申請形式も申請者がうんざりするようなものではなく、往復のエアチケットと、月あたり一定額の資金が月に1度銀行口座に振込まれると、その支出についての報告義務はないに等しいほど「寛容」なもので、領収書を煩雑に保存する必要は皆無であった。研究者に全幅の信頼を置いているのである。

次に、順序が妥当とも思わないが、今回私を受け入れて下さった中央

研究院・台湾史研究所研究員の、林玉茹氏に感謝しなければならない。おそらく私よりも干支で2周り年齢は下であろう。台湾総統府直轄の中央研究院は、北京のアカデミーをモデルに成立したものであろうが、学部学生のない大学院大学のようなもので、南港地区に数十の研究所が集結したところである。彼女はそこにある台湾史研究所に所属して年中精力的に世界各国との渉外にあたりながら、多くの著書や論文を発表しているバリバリの研究者である。日本と台湾の関係で日本にもよく訪れるようで、私の故郷が四国と聞いて、金比羅とか讃岐うどんをよくご存じであった。今回の私の中央研究院滞在の受け入れ役も快諾され、研究所の10階のオフィス、人文社会科学ビルの素晴らしい図書館の利用について、細かいご配慮をして頂いた。台湾内でも忙しいスケジュールを割いて、よくランチに誘って頂いたし、担当する大学院生たちと研究所内のセミナーに参加させて頂きもした。3年前と違って、かなり慣れた私の下手な英語で、様々な話をして頂いて、これも感謝の言葉もない。台湾史研究所のスタッフ、図書館スタッフには、中国語もできない私がさぞかし、ご迷惑であったのではと、反省している。¹⁴

台湾大学総図書館5階のスペシャルコレクション担当のライブラリアンには、埃にまみれた資料を何度も出して頂き感謝の極みである。さらに、新図書館振辜甫先生記念図書館の葉さん、南投の国史館台湾文献館の陳さん、などなど、いちいちお名前を挙げられない方々のご協力・ご指導によって、私の台湾における調査研究は可能となった。この場を借りてお礼申し上げたい。

14 中央研究院で定期的で開催されている、黄富三教授を囲む植民地問題研究会にゲスト参加させて戴き、メンバーの方々から、ご親切なご指導を得たことも記しておきたい。

参考文献

中央研究院 総務組 [2013]、中央研究院展館簡介

伊藤 潔 [1993]、台湾 四百年の歴史と展望、中央公論社。

竹内 洋「大学・インテリ・教養 第5回 1930年代前半の全共闘運動 教養難民の系譜 (5)」

山口 修 [1998]、台湾の歴史散歩、山川出版社。

吉田東伍 [1909]、大日本地名辞書、富山房。

渡辺邦博 [2013]、台北高等商業高等学校の商業教育について、関西学院大学経済学論究 67/1、

渡辺邦博 [2015]、台北高等商業学校卒業生名簿作成に関する諸問題、社会科学雑誌 12.